

達成度(評価)	
A	: 十分達成できている
B	: おおむね達成できている
C	: やや不十分である
D	: 不十分である

学校名	吉野ヶ里町立東脊振小学校
1 前年度 評価結果の概要	・学力向上が大きな課題であり、スキルタイムの改善、家庭学習習慣の定着、学び合い(主体的・対話的で深い学びを含む)を充実させた授業改善が不可欠である。 ・タブレットをより有効に活用し、プログラミング教育の推進とともに充実させていくことが大切である。
2 学校教育目標	「夢に向かって輝く」児童の育成 ～優しく 賢く そして逞しい 東脊振の子～
3 本年度の重点目標	① 学力向上にむけ、朝のスキルタイム、家庭学習習慣の確立、学びタイムの充実・改善を図る。 ② 豊かな体験活動を通して、自己肯定感の醸成とより良い人間関係づくりを推進する。 ③ 教育の質の向上に向けたICT利活用教育の充実を図る。

4 重点取組内容・成果指標

(1)共通評価項目				中間評価		最終評価		主な担当者			
評価項目	重点取組内容	成果指標(数値目標)	具体的取組	中間評価		最終評価					
				進捗度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)	実施結果		評価	意見や提言	
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師が90%以上にする。	・教職員間でマイプランを共有するとともに、校内研修等により取組の促進を図る。	C	・学力向上対策評価シート共通実践事項「書く活動を授業に位置付ける」は、ほぼ実践できている。 ・マイプランを共有し、校内研修等により取組の促進を図ることは十分でない。10/14に実施予定である。	B	・12月の県調査の結果を受け、全職員で調査分析による研修会を行った。それぞれの学年の国語や算数の各領域における課題や今後の指導の留意点などを確認し合うことができた。教育センターの分析と合わせて、この分析結果を今後に活かしていきたい。	B	・学校目標としては、妥当な項目を掲げていると思われるが、達成状況については、今一歩の努力が必要と思われる。 ・コロナの1年間で、自己評価をしたり結果を出したりするというのも無理があったのではないと思う。	・学力向上対策コーディネーター ・学び部	
	○スキルタイムを充実させた教育活動	○スキルタイムがためになり、自分の成長が分かる」と答える児童を90%にする。	・学級で統一した課題に取り組み、基礎基本の定着を図る。 ・随時、取組の成果を確認する場を設ける。	B	・全校で統一した課題(国・算)に取り組みることができた。 ・スキルタイムの時間に、校長、教頭、級外が3年以上の各クラスに入り、複数での指導にあたることで、基礎・基本の定着を図ることができた。	B	・朝のスキルタイムの時間に曜日を決め、全校で統一した課題(国・算)に取り組みすることで基礎基本の定着に繋がってきた。応用問題もあり進んで取り組む児童も見られた。 ・スキルタイムがためになったと答える児童は80%。	B	・低学年や高学年の保護者の意見の差も十分あるし、子ども達の学力の差もあるので、今の現状を見つめて、課題を克服するために何をやればいいのかをしっかりと考えて取り組むことが大事ではないか。	・学び部	
	○学習内容の定着に向けた学びタイムの充実を図る授業の実践	○「学びタイムは、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思う」と答える児童を90%以上にする。	○「授業づくりのステップ1・2・3 Vol.2」を踏まえ、全教科半分以上の授業で「話し合う活動」を設定する。 ・道徳の研究を他教科にも活かしていく。	・話し合う活動を取り入れた授業を数多く実践することで、児童も慣れ、スムーズに話し合い活動に移れるようになってきた。	B	・話し合う活動を取り入れた授業を数多く実践することで、児童も慣れ、スムーズに話し合い活動に移れるようになってきた。	B	・学びタイムを通して友達と交流することで、自分の考えを深めることができるようになってきた。	B	・コロナ禍の中で授業を参観する機会が少なかったが、今後は、考える力(応用力)をつけさせるのが大事ではないかと思う。 ・タブレットが全児童に貸与されるようなので、それ活かして、より良い活用が図られることを期待する。	・学び部
●心の教育	●児童が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	●「友達と仲よくできている」「いいこと、悪いことを考えながら生活している」と答える児童を90%以上にする。	・人権講演会(人権集会)や道徳に関するアンケートの実施 ・道徳科の授業づくりに関する校内研修等の実施 ・保護者や地域の方と連携した〇〇体験の実施	B	・道徳に関するアンケートを取り、自分の気持ちや考えの実態把握を行った。現段階での実態を参考にして、道徳授業の実践に取り組んでいる。 ・低、中、高学年部に分かれ、研究授業に取り組み、グループ協議を中心とした研究会を行っている。	B	・児童アンケートの7項目中6項目で8月より12月の方がよい結果となった。7項目を平均すると90%以上が質問項目に対し「そう思う」「たいそう思う」と答えた。 ・研究授業においては、道徳の評価という点で課題が残ったが、学びタイムのあり方の工夫を中心に研究を進めることができた。	A	・道徳が教科になってまだ間もない時である。行動や言葉にはあらわれて来ない内心の部分の評価は難しいと思う。 ・このコロナ禍において、年間計画に沿って全体研やグループ研で意見を交換され、更なる高みを目指して先生方の達成感・満足感が伝わってきた。	・研究主任	
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○「いじめ防止等(いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対応等)」について組織的対応ができている」と答える教員を95%以上にする。	・いじめの認知・発覚に対する対応マニュアルを作成・見直しを行う。 ・毎週水曜日の連絡会で問題行動等の全校共通理解の場を設け、情報の共有化を図り、対応を迅速に行う。	B	・月に1回の「いじめ日アンケート」として困っていることに関するアンケートを実施している。小さなことでも児童が記入しているため、担任が状況を把握しながら継続した指導ができている。 ・9月にいじめアンケート調査を全児童・全保護者を対象に行った。気になる事例が6件あり、そのうちの1件はいじめと認定し対応している。再発防止も兼ねて見守り中である。	B	・月に1回の「いじめ日アンケート」は1年間継続して実施した。自分自身のことだけでなく友達のことへの気付きも記入するようになっているため、児童の実態把握をより詳細にできている。 ・対応や配慮が必要な事案に関しては、担任を中心として管理職・生徒指導主任等と内容を共有しながら継続した指導ができている。	B	・不安なことを胸で思っているより、裏に出すことで不安も出て消えると思うので、話しやすい関係を築いて、子ども達の話をよく聞いてほしい。 ・たとえ反対意見であっても、自分の意見をはっきり言う子どもを育てていきたい。 ・先生の元気で明るい姿が、子ども達に安心感につながると思う。	・自分づくり部 ・教頭	
	◎ふるさとへの思いを醸成するための教育活動	○東脊振のよさを「低学年1つ以上、中学年3つ以上、高学年5つ以上」言える児童を90%以上にする。 ○クレーン作戦など地域の行事に、年2回以上参加する児童を90%以上にする。	・生活科や社会科、総合学習に地域素材を導入する。 ・学びの中で、人と自然にかかわる場面を設定する。 ・地域人材の活用 ・道徳との関連を考慮して指導にあたる。	・感染症対策を取りながら、児童の体験活動の重要性を考え、可能な限り実施及び実施予定である。 ・3年生が地域養蚕であるお茶の体験活動を行った。GTの多良先生からお茶に関する講話を聞き、ふるさとへの思いを高めることができた。	B	・感染症対策を取りながら、児童の体験活動の重要性を考え、可能な限り実施及び実施予定である。 ・3年生が地域養蚕であるお茶の体験活動を行った。GTの多良先生からお茶に関する講話を聞き、ふるさとへの思いを高めることができた。	B	・コロナ禍の中であったが、3年生の総合的な学習の時間でお茶についての学習や、5年生の田植え、種刈りのミニ体験など、地域の方々の協力を得て、少しでも体験させることができた。 ・来年度も、限られた条件の中ではあるが、地域の方にGTとなって、地域との交流学習を組みながら地域への愛着を培ってきたい。	B	・子ども達は、地域との関わりが大切だと思う。自然と学び合う中で道徳心も身につくと思う。 ・コロナ禍の時に、子ども達を守りながら学校運営をされるのはさぞかし大変だったことと思う。無事乗り越えられたのが嬉しい。毎年楽しみにしていた式や行事、集会への参加、授業への参観などができなかったのが残念だった。	・教務主任、教頭
○あいさつの励行と相手を思いやった言葉遣いの指導の充実	○「あいさつがよくなった」と答える児童を90%以上、「正しい言葉遣い」ができた」と答える児童を80%以上にする。	・毎月の生活朝会で話題にする。 ・学習の場において正しい言葉遣いを身に付けさせ、普段の生活の場でも活かすようにする。 ・児童の実態や学校の取り組みを保護者に周知し、家庭と連携した取り組みを推進する。 ・ボランティア委員会との連携を図り、気持ちのよい挨拶を進んでできるような取り組みを工夫していく。	・年間を通したためあてとして挨拶と言葉遣いの指導を続けている。 ・毎月の生活朝会で、具体的な方法を示しながら「よりよい挨拶の仕方」「正しい言葉遣い」について話している。 ・2学期後半に自己評価としてアンケートをとる予定。	B	・年間を通したためあてとして挨拶と言葉遣いの指導を続けている。 ・毎月の生活朝会で、具体的な方法を示しながら「よりよい挨拶の仕方」「正しい言葉遣い」について話している。 ・2学期後半に自己評価としてアンケートをとる予定。	C	・1年間を通して学級・学年指導、生活朝会の中で具体的な方法を示しながら「あいさつ」「正しい言葉遣い」の指導を継続してきた。職員から見ただけの評価としては指導の効果が現れているように感じる。 ・2学期の自己評価(児童アンケート)においては、「あいさつがよくなった」項目の達成率が85%、「正しい言葉遣い」ができた」項目の達成率が71%であった。自己に厳しさと思われるが、指導方法にも改善の余地があると考えられる。	B	・学校の教育活動の根幹を道徳教育にすえてあること、この価値観の多様化している時代において望ましい。 ・地域においては、昔も今も子どもは子どもらしく元気に体を動かしている姿を見かけ、最近のこころ時代では、周りの大人が声を掛けるのも難しい時代なのだ。しかし、あいさつや言葉づかいについても、大人の方向から模範となるような振る舞いや話を聞く耳をもつて子どもに接してほしい。	・自分づくり部	
●健康・体づくり	●望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	●「健康に食事は大切」であると答える児童を90%以上にする。 ○朝食をとって登校する児童を100%にする。	・生活状況調査、食に関する意識調査の実施 ・保健だよりの発行 ・朝ごはんの大切さを学級活動でも推進する。	B	・7月に実施したアンケート調査で「毎日朝ごはんを食べている」と回答した児童が95%。 ・保健便りを発行し、保護者への啓蒙を継続していく。 ・再び、朝ごはんの大切さについて学級活動での指導を推進する。	B	・12月に実施したアンケート調査で「毎日朝ごはんを食べている」と回答した児童が95.2%。 ・校内で10月に食育月間を設定し、朝食の大切さについて意識化を図った。更に、家庭への啓蒙が必要と感じる。	B	・現在は、知育・徳育・体育の次に食育が重視されている。生き抜く力をつけるために食育の実践を図ることが必要である。地域との連携強化のために学校側が積極的に協力依頼を発信していきたい。	・仲間づくり部	
	○運動機会の確保と規則正しい生活習慣の確立	○業間や昼休みにおいて、「元気に体を動かした」と言える児童の割合を80%以上にする。 ○「早寝」「早起き」の児童の定着率を80%以上にする。	・全校でスポーツフェスタを企画し、運動機会の確保する。 ・外で遊ぶように休み時間に声をかけたり、体育委員会で全校で遊ぶ日を設定する。 ・便利による家庭への啓蒙をする。	・7月に実施したアンケート調査で、業間休みや昼休みにおいて、「元気に体を動かした」と回答した児童が83%。 ・スポーツフェスタは、今のところ実施できていない。 ・7月に実施したアンケート調査で、「早寝・早起き」ができた」と回答した児童が84%。	A	・7月に実施したアンケート調査で、業間休みや昼休みにおいて、「元気に体を動かした」と回答した児童が83%。 ・スポーツフェスタは、今のところ実施できていない。 ・7月に実施したアンケート調査で、「早寝・早起き」ができた」と回答した児童が84%。	A	・12月に実施したアンケート調査で、「休み時間や休みの日に、元気に体を動かした」と回答した児童が85.9%。 ・12月に実施したアンケート調査で、「早寝・早起き」ができた」と回答した児童が84.4%。 ・11月に早寝・早起き「朝ごはん」のがんばろうカードを配付して1週間実施し、意識化を図った。今後も実施していく必要がある。	A	・計画された活動や行事など、規模を縮小されたり、例年とは違った形で実施されたりしたことは、子どもたちや保護者の満足度も高かったと思う。自己評価の「学校は楽しい」のパーセントが両者とも高かったのがそれを物語っていると思う。	・仲間づくり部
	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●全職員の時間外勤務時間の平均を45時間以内にする。	・定時退勤日の設定 ・衛生管理委員会での情報提供	・9月の体育大会前は、19時をオーバーすることが多かったが、10月に入り、19時までに退勤が定着しつつある。 ・7月のストレスチェックでは、やや疲れが見られる教師が4~5名いた。声かけが必要。 ・衛生委員会は、12月に開催予定である。	B	・9月の体育大会前は、19時をオーバーすることが多かったが、10月に入り、19時までに退勤が定着しつつある。 ・7月のストレスチェックでは、やや疲れが見られる教師が4~5名いた。声かけが必要。 ・衛生委員会は、12月に開催予定である。	B	・毎月の業務記録を職員会議の資料として公開し、勤務時間の縮減に向けた意識啓蒙を行ってきた。しかし、成績処理が多忙化する学期末は、一部の若手教員がやや退勤が遅くなりがちだった。 ・職員に早めの成績処理の声掛けを行うと共に、管理職自身も19時までの退勤を自ら示す必要があった。	B	・学校として、適切に対応されていると伺える改善点などは項目を絞り、学校だけでなく、保護者を含め全体が理解して取り組み、1項目ごとに着実に改善していくことが働き方改革にもつながっていくと思われる。	・教頭、校長
○教職員の職務意欲の向上	○「仕事にやりがいを感じている」と答える職員を90%以上にする。	・チーム東脊振として組織的な対応の強化と職員の自己肯定感を高める方策を考えていく。	・それぞれの教師の校務分掌で取り組んでいる業務にのびのびの言葉かけをするようにしていく。	B	・それぞれの教師の校務分掌で取り組んでいる業務にのびのびの言葉かけをするようにしていく。	B	・職員同士で、忙しならないようにお互いに声を掛け合う姿が見られた。また、校長からの差し入れ等で多忙感への気持が和らぐことがあった。	B	・先生方の回答で、「だいたいそう思う」が多すぎる。自信が努力され自信をもち取り組まれているなら、「A」「そう思う」と回答できるような取り組みを期待したい。	・教頭、校長	
(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目											
評価項目	重点取組内容	成果指標(数値目標)	具体的取組	中間評価		最終評価		主な担当者			
				進捗度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)	実施結果		評価	意見や提言	
◎地域愛を高める教育	○学力向上につながるICT利活用の推進	○タブレットを低学年年間10回以上、中学年20回以上、高学年30回以上活用した教員を80%以上にする。	・タブレット研修会の実施 ・ICT支援員の有機的な活用を多くなる。	B	・2学期初めの1か月間で、低学年では週2回、中学年では週3回ペースで、上学年では毎日使用しているクラスがある。画像や動画の撮影のための使用が多い。ネットへの接続は通信量に上限があり、一斉接続はできない。QRコードの読み取りで、使用頻度がさらに高まると思われる。	B	・タブレットPCが一人1台ずつ配布され、使用頻度がさらに増加している。低学年は、起動やシャットダウンの仕方、お絵かきアプリを使用し、基礎的なスキルを身に付けている。3年生は、国語で学習したローマ字を入学まで覚悟して、キーボードの操作に慣れた。上学年は、スクリーンやパワーポイントなどで、児童の学びの場や人物の画像を取り込んだサイズをプログラミングして、PC活用のよさを体感できた。	B	・子ども達の教育活動を充実させるためには、学校だけでは手が届かないところもあり、なご一層の家庭や地域との協力が必要であると考え、 ・全体的には前向きな取り組みを行っているが、アンケートの結果では学校教育目標の達成に対する先生方の意識が不足しているのではないかと感じる。	・学び部 ・情報教育推進リーダー	
●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育											
5 総合評価・ 次年度への展望	・学力の向上を目指し、学習規律の徹底と基礎学力の定着を図る。また、全児童に貸与されたタブレットを活かし、スキルタイムや授業での活用の充実を図る。 ・これまでの研究で培ってきた道徳教育による心の教育を基盤に、あいさつの励行と相手を思いやる言葉づかいの徹底を図る。 ・豊かな体験活動を通して自己肯定感の醸成を育むとともに、地域との連携を充実させながら郷土を愛する意識をより一層高める。										